

吉備国際大学研究紀要  
 (人文・社会科学系)  
 第23号, 165-177, 2013

## 異端カタリ派の物語：『アルビジョワ十字軍の歌』 —— 写本と出版本について ——

加藤 健次

### Récit historique des Cathares: *La Chanson de la Croisade albigeoise*, —— Un Manuscrit et les Editions ——

Kenji KATO

#### Prologue

*La Chanson de la Croisade albigeoise* est un manuscrit poétique de 9578 vers, écrit en langue d'oc (=occitan, provençal) entre 1208 et 1219 par deux auteurs différents et racontant les événements survenus dans l'Occitania, le Midi de la France, depuis l'invasion du comté de Toulouse et de l'Albigeois par les croisés jusqu'à la mort de Simon de Montfort.

Ce poème est aussi un irremplaçable témoignage, celui d'un homme directement mêlé aux événements qu'il relate, et dont le rang social fit même un observateur privilégié; exemple extrêmement rare d'une chanson de geste qui a donc valeur de chronique historique.

Ce long poème narratif, chanté est un reportage des événements du monde réel, de la société méridionale du XIII<sup>e</sup> siècle. C'est un récit historique conté de vive voix irremplaçable au public de son temps. Ce texte fut écrit pour la psalmodie, la profération de conteurs accoutumés aux estrades. Il est donc très important, come dit Henri Gougaud, «à entendre aussi près que possible de ce qu'il fut, d'en rendre perceptible la palpitation, la couleur sonore, la musique. Le parfum de grand vent»<sup>1</sup>.

Dans ces papiers, on va voir quelques questions sur un manuscrit de Bibliothèque Nationale N<sup>o</sup>. 25425 et les éditions imprimés ou les texts publiés, en regardant la vélin et les lettres (Protgothic aux environs du XII<sup>e</sup> et du XIII<sup>e</sup> siècle) de ce manuscrit BN-25425.

**Key words** : Cathares, Croisade albigeoise, manuscrit

キーワード：カタリ派, アルビジョワ十字軍, 写本

はじめに

『アルビジョワ十字軍の歌』 *La Chanson de la*

*Croisade albigeoise*は、1208年から1219年にかけて、  
 当時「オクシタニア」Occitaniaと呼ばれていた南  
 フランス、ラングドック地方を中心に勃発した戦

乱の歴史的事実を記録した年代記*chronique*である。この年代記は、オック語*langue d'oc*（オクシタン*occitan*, プロヴァンス語*provençal*, いずれも「はい」をオック*oc*と言っていた中世南フランス諸方言の総称）で書かれた韻文9578行からなる文学的テキスト＝歴史的故事*récit historique*である<sup>ii</sup>。各行は12音綴りのアレクサンドラン*alexandrins*で、各節毎に見事な脚韻*rime*が踏まれており、伝統的な武勳詩*chanson de geste*の韻文形式がとられている。

この韻文テキストで語られている物語の内容（＝物語内事実）は、ローマ教皇イノケンティウス3世の命を受けたシモン・ドゥ・モンフォール Simon de Montfortを総指揮官とする十字軍と、ラングドック＝リュシヨン地方やミディ＝ピレネー地方の異端カタリ派および彼らを擁護する南仏軍（トゥールーズ伯、カルカソンヌ副伯、フォワ伯、アラゴン王等）との戦争に関わる様々な出来事（すなわち十字軍を招集せざるを得なくなったカトリック教会の事情と、異端カタリ派撲滅に関わる事件）についてである。

複数の語り手、すなわち①吟遊詩人トルバドゥール *troubadour*, ②旅芸人ジョングルール *jongleur*, ③宮廷芸人メネストレル *ménestrel*等の、〈声〉によって語り継がれてきた軍事的な物語<sup>iii</sup>を、一人あるいは何人かの別の書き手 *sujets écrivants*が、「歌われた物語詩」*poème narratif, chanté*<sup>iv</sup>として文字表記＝作品化したものである。したがって宮廷内でのみ歌われた恋愛をテーマとした吟遊詩とは幾分異なっている。実際に起こった社会的事件を題材にした口頭伝承物語が文字化された文学作品として、極めて貴重なものである。『アルビジョワ十字軍の歌』という韻文物語は、13世紀南フランスの社会と宗教について公衆に向けて語られた、かけがえのない“時代の証言” *vive voix irremplaçable au public de son temps*となっている。

中世末期南フランスで栄えた韻文で物語を歌うと

いう文化、すなわち“オクシタニアの吟遊する文化”の背景には、『歌』を歌うことによって自分達の社会を襲った悲劇を後世に伝承しようとする、切羽詰まった芸人達 *les artisans*の思いが横たわっている。恋愛をして、歌って踊っていただけ、と誤解されている吟遊詩人達には、悲劇の語り部というもう一つ別の面があった。この時代に起こった戦争の真ただ中にいたとされる彼ら＝作者達は、人間の生死に係る悲劇を語り伝える証言者となろうとした。文字の読めない人々にもその惨劇を語り継いでいこうとした。「もうすぐ八世紀が経とうとしているというのに、アルビジョワ派に向けられた十字軍の記憶は消えない。いまだに悲しみと憐憫の情を呼び起こす」<sup>v</sup>とジョルジュ・デュビイ Georges Dubyが述べているように、惨劇を語り継ごうとした作者達によって歌われ語り継がれた事実の諸断片が凝縮している『アルビジョワ十字軍の歌』は、韻文で書かれた物語としての文学的価値以前に、史実を告げる資料としての貴重な価値をもっているということは、最初に確認されなければならない。

アルビジョワ十字軍の史実を今に伝えるその他の散文資料として、①ピエール・デ・ヴォー＝ドゥ＝セルネイ Pierre des Vaux-de-Cernayの『アルビジョワ史』 *Hystoria albigensis*と、②ギヨーム・ドゥ・ピュイローランス Guillaume de Puylaurensの『年代記』 *Chroniques*が挙げられるが、これら二つの年代記に記録されている〈事実〉は韻文詩編の『歌』に依拠しているとさえ言われている<sup>vi</sup>。オクシタニアの異端カタリ派は激しい弾圧で火刑に処せられるか自ら命を絶つたために、その資料のほとんどが失われているのである。語り継がれてきた『歌』と、廃墟と化してピレネーの山間に散在する城塞跡のみが歴史的事実を伝えるものとなっている。

そのようなことを踏まえたうえで、本研究は次のように進められるだろう。1) 写本稿BN-25425と出版本、2) 物語内事実、3) 作者と言われて

きた二人の人物、4) トルバドール(ジョングールあるいはメネストレル)と写本稿との関係、について見ていくことで、「言葉を話したり詩歌を歌ったりする主体の構造」la structure des sujets parlants, chantants et écrivants les parols ou la poésie lyriqueを確認したい。また『アルビジョワ十字軍の歌』に係った無名の人々からなる集合体としての表現主体によって「テキスト化されていくシステム」le système de Textualization de *La Chanson de la Croisade albigeoise*を提示していきたいのだが、拙稿ではまず、その1)の部分、フランス国立図書館で19世紀前半に発見されたこの『歌』の写本とはどのような〈モノ〉なのか、またそれはどのようにして800年後の我々の目に触れるようになったのかについてまとめておきたい。

## 1. 〈モノ〉としての写本稿BN-25425

フランス国立図書館の蔵書庫fonds françaisに25425番を充てられた写本稿(以下、写本稿BN-25425と呼ぶ)がある。中世南フランスを代表すると言ってもよいこの美しい写本稿は、120枚のヴェランvélinで成り立っている。それらの表裏239頁に、プロトゴシックProtogothicの文字が羽ペンで手書きされている<sup>vii</sup>。書き出しの大きい文字は赤と青で交互に彩色され、第1節と第143節のイニシャルは他より大きく、金箔で繊細に縁どられた装飾頭文字initiales peintes et ornéesになっている。そのうち13カ所には挿絵が描かれている。有名な伝説的場面すなわち襲撃や占領のシーンで、それらは後に細密画として彩色される予定であったと思われるが、色が入れられないままの黒インクによる素描画で、各頁の約半分から三分の一部分に描かれていた。つまりBN-25425は、文字の部分はほぼ写されているが、写本としては未完成のまま蔵書庫に収納されていたのである。

ところで、西洋で紙が生産されるようになるのは1230年以降のイタリアにおいてであると言われて<sup>viii</sup>いる。写本稿BN-25425の文字が書き込まれているヴェランvélinとは「犢皮紙(とくひし)」のことで、死産した仔牛の柔らかい皮を加工して作る高価な被筆写支持体(文字書き込み用メディア)である。羊皮紙としばしば混同されるが、はるかに薄くて高級である。もともとラテン語の「仔牛」= Vitelusという意味で、紙よりも耐久性があり、ヴェランそのものが高価なので、そこに文字を書く(写す)ということは特別な意味を持っていた。書かれる内容も、ヴェランに匹敵する価値の高いものでなくてはならなかった。しかし時代と共に、なかなか仔牛の皮は手に入りにくくなり、やがて材料にかかわらず高級な皮紙はすべてヴェランと呼ばれるようになった。

写本稿BN-25425に使用されている文字はゴティック体である。この書体は12～15世紀頃に使われた写本用の書体で①「プロトゴシック」Protogothic(12世紀後～13世紀前)、②「ゴティック・クoadラータ」Gothic Quadrata(13～14世紀)、③「ゴティック・テクストゥーラ」Gothic Textura(13～15世紀)等がある。Texturaはラテン語で「織物」を意味し、〈テキスト〉の語源でもあるが、ぎっしりと詰まった文字面が「織布」を思わせるところからそう呼ばれた。しかしこの写本稿BN-25425に書かれている文字は、14～15世紀の、鋭角張っているゴティック・クoadラータ体に比べると、若干不揃いで丸みを帯びている。「o」や「n」は肩の部分に丸みがあり、ピリオドは完全な四角ではなく楕円形に近い。その柔らかで繊細な装飾性はカロリング体からゴティック体へと移行する段階のプロトゴシック体の特徴をよく示している。『歌』が写記された時期もプロトゴシック体が用いられた時期と一致する。

これは、マルタン=シャボ版(1931年初版本)に付されている写真を複写したものである。第三章(第



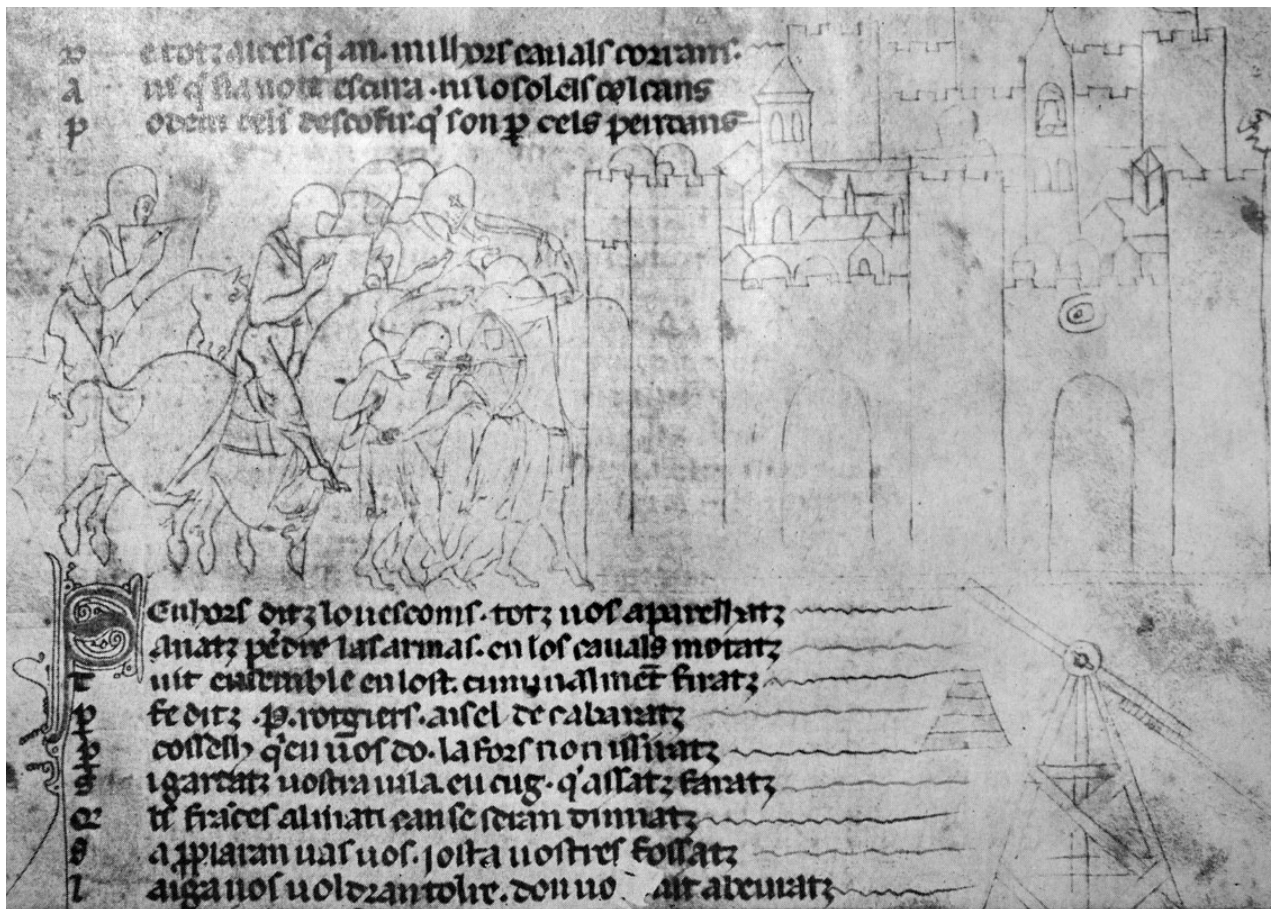


写真1. カルカソンヌ城の襲撃場面に描かれている挿絵

23節)の冒頭, 1209年7月から8月のカルカソンヌ城襲撃の場面に描かれている挿絵である。堅い守りを誇ったカルカソンヌの城とそれを攻撃しようとする十字軍, さらに右下には当時驚異的な破壊力を発揮した巨大投石機が描かれている。韻文各行12音アレクサンドランの6音目には句分点point marquant la césure de chaque versが置かれ, 行末が短く終わってしまう場合, その余白に右端まで波線が長く引き伸ばされている。それらは鮮やかな赤色と青堇色で交互に彩色されている。リヨン市立図書館所蔵の写本『カタリ派儀礼書』*Rituel Cathare*でも, 書き出しの大文字は赤と青で彩色され, 句分点はやはり斜めに伸ばされている(その先でユーモアに満ちた魚が躍っている模様に装飾されていたりする)<sup>15</sup>。それと同様に, 『歌』の余白右へ伸ばされた波打つ線は当時写本をした書写生の素朴な“遊び心”を表

しており, ロマネスク教会を造った石工達の飾らない彫刻にも通じている。

13世紀の写本作製技術は, 皮紙の作製, 羽根ペンの作製, インクの調合から始まり, 文字の筆写, 金箔貼(ギルディング), 彩色, 製本の技術に至るまで幅広い分野に渡る。「羽根ペンは鷺鳥や白鳥のような大型の鳥の外側の翼の羽から作られた<sup>16</sup>」。インクには, 顔料を筆写素材に付着させる「顔料インク」と, 筆写素材そのものを変色させる「染料インク」があったが, ヴェランに用いられるインクの多くは「没食子(ぼっしょくし)インク」と呼ばれる染料インクで, この主成分は「タンニン」と「酸化鉄」である。タンニンが皮のコラーゲン繊維を化学的に変形させて強い結びつきを作り, 剥がれることのない黒色を作り出す。含まれている鉄が空気に触れることにより酸化して黒くなる性質を持っている

ので、書いているときは薄めの色だが、時間が経つと濃い黒色になる。さらに、時間が経つにつれて茶色く変色していく。写本稿BN-25425の文字が茶色であるのも、没食子インクが変色した結果である。

犢皮紙(ヴェラン)をメディアとして、インク、顔料、金泥、金箔などで写本を装飾する技術は、印刷技術のなかった中世初期に貴重な『聖書』や『祈祷書』を作製するために発達した技術である。たいていは修道院の書写室で、修道士や学僧が羽ペンで文字を書くというよりも一字一字描いていくのである。禅宗における画書や写経と同様に、その行為そのものが修行であり、それを描くことに係る者を神に近づけるものだった<sup>xi</sup>。しかし13世紀になると、装飾技術は修道院を出て、世俗社会に広まっていった。学問の中心都市*city*で写字する学徒も現れてきた<sup>xii</sup>。

12～13世紀頃の貴重な写本は、修道院や司教座教会に付属する教育施設(後の大学)に寄せ集められ、修道士や学僧たちによって新たな写本が生産されていった。書物は、文字の読める人たち(すなわちラテン語を修得した宗教関係者たち)のためのものだった。中世ガスコーニュ語の専門家・工藤進は、中世に文字で記号化された写本は特権階級のものだったと指摘して、「当時文字で書かれた言語はラテン語であり、しかも羊皮紙の貴重な書物は修道院の奥深くしまい込まれていたのである。たまに見かける文字とは教会の彫刻の上に刻まれた(中略)ラテン語であった。こうしたものは彼らにとって文字というよりむしろ像の一部であり、飾りであった」と述べている<sup>xiii</sup>。

地位の高い低いに関係なく、文字の読めない人々の情報収集は〈声〉に頼っていた。〈声〉は覚えて、口伝えしなければならなかった。覚えやすいように音韻が必要だった。文字は、「僧侶または少数の特権階級を除き」、中世社会を生きる多くの人々にとっては「存在しないに等しい」ものだったと言われていた<sup>xiv</sup>。彼らにとって、文字は必ずしも日常話して

いたオック語とは結びついていなかった。文字の読めない人々にとって、自分たちが日常的に話している言葉を文字化することは、書物を作るということとはまた違う次元で必要だった。

以上見てきたように、『アルビジョワ十字軍の歌』の写本稿BN-25425は、“知識のため、学ぶため”の文字ではなく、日常話されている俗語を文字化し清書したものである。それは、文字の読める人に向けてではなく、文字の読めない人々に向けて、どうしても伝達されなければならない“何か”が書かれているということを示している。人々が教会の説教だけではなく、真実の〈声〉と世界で起こっている出来事の断片を寄せ集めた歴史的物語*recit historique*を希求していたのだ。

## 2. 写本にまつわるいくつかの謎

写本稿BN-25425の成立に関してこれまでの調査で解明されているのは、次のことである。

On ne connaît qu'un seul manuscrit complet de *la Canson* (Paris, Bibl. Nat. fr., 25425). C'est une copi, probablement toulousaine ou de la region de Toulouse, datant des environs de 1275.<sup>xv</sup>

この写本は、完全なかたちで現存する『歌』の唯一のもので、書写されたのが1275年に「遡行する」*datant*ということは、この写本がその頃の痕跡を持っているということを意味している。同時に、この写本のオリジナル原稿は、少なくともそれ以前のトゥールーズまたはその周辺で書かれたということを示している。『歌』がつくられたのは1212～19年頃で<sup>xvi</sup>、書かれている内容が1208年から1219年頃にかけてトゥールーズ周辺で起こった事柄であることから、この写本が書写されたのは物語終了後の1219年から1275年の間ということになる。しかしそれは

作者達が自ら書いたオリジナル原稿なのだろうか。半世紀以上の時間が経過してから作者達以外の誰か別の人物によって書写されたということだろうか。『歌』を“つくった”のは二人の人物だと見なされているが、オリジナルを“書いた”のは何人なのだろうか。“写した”のはいつどこで、どういう人達だったのだろうか。そもそも、『歌』をつくった人、歌った人、記録した人、写した人、それらは同一人物なのだろうか。これらの疑問に対する答えを、この写本から読み取ることは不可能である。

Le Moyen Âge ignore — pour le dire vite — la notion de texte définitive. C'est l'imprimerie qui imposera de distinguer le manuscrit que l'auteur peut encore modifier du texte désormais intangible, reproduit grâce à elle en de nombreux exemplaires identiques. Avant l'imprimerie, à l'époque où tout est manuscrit, le texte peut toujours être retouché et chaque nouvelle copie peut toujours être l'occasion de nouvelles interventions. Ces interventions peuvent être le fait de l'auteur, mais aussi bien de toute main autorisée, celle d'un copiste, d'un glossateur, d'un continuateur. L'époque n'a pas le même sentiment que nous de la propriété littéraire et pas davantage de la clôture du texte. Les œuvres commencées par un auteur et poursuivies par un autre ne sont pas rares au Moyen Âge.<sup>xvii</sup>

そもそも中世には決定稿＝テキストという概念などなかった、とジョルジュ・デュビイは指摘している。印刷技術が発明されて初めて、著者のみが加筆・修正できる原稿が特別扱いされるようになった。そのおかげで同一の模範的内容を複製できるようになったのである。印刷技術がないころはすべての原

稿、テキストが加筆可能で、それぞれの新しい写本が、常に、さらに新しい加筆に晒され続けていた。それら写字僧や写字職人や用語解説者や物語の続きをつくる人たちの干渉するすべての〈手〉が集まって作家という存在を成立させていたのである。その時代には、我々にとって当然の、著作権といった文学を所有する感覚もなければ、テキストという限定された「垣根」la clôture du texteすらもなかったもので、ある作家によって書き始められた作品が、別の作者によって書き継がれるということは、決して稀なことではなかったのである。

写本稿BN-25425の保存状態は隅々まで極めて良好なのだが、書かれている韻文の文法的な誤りや単語の綴り間違い、記載漏れ等が随所に見受けられる。といってもその欠落箇所は物語内容の展開に影響するものではない。難解で謎の詩行が散在している原因は、各地の方言、しかも話しことば＝俗語の音を記載する際の文字表記の不統一性に、写本を行った写字僧や書生の不注意による誤りが重なったことにあると考えられる。

写本稿BN-25425には、きちんとした作者署名もなければ、タイトルすらもないのである。あるのは、余白に書き込まれたメモのような落書きのみである。この写本の余白には、いたるところに、判読可能なもの、不可能なもの、様々なメモのような書き込みがある。同一人物ではない、複数の人の手によって、色々な場所で、別の時代に書き込まれたものである。どれも南仏の方言で書かれている。そのほとんどが内容的に取るに足らぬものと推察されるが、一か所だけ、つまり最後の239頁、下半分の余白に書き込まれているメモは注目に値する。

Jorda Capella deu sus aquest romans XV.  
tornes daryentz bos que li prestei (ou  
presteri) a VI. De fevrier M. CCC. XXXVI.<sup>xviii</sup>



ここにはジョルダ・カペーラJorda Capellaという人物、あるいはジョルダン司祭Jordan le chapelainが、M. CCC. XXXVI.=1336年の、VI. De fevrier = 2月6日に、XV. tornes=15リーブル（1795年以前の通貨単位、クロード・フォリエルClaude Faurielは15 livres tournoisとみなしているが、マルタン＝シャボMartin=Chabotはフィリップ王政化で流通していた銀貨としている）でこの写本を譲り受けたと記されている。Capellaは、大文字になっているが、礼拝堂を管理する司祭のことで、その司祭がジョルダンJordanという名前であったのだという仮説に依拠すれば、ジョルダン司祭はこの写本をかなりの金額を支払って入手したということになる。1837年にこの写本を国立図書館で発見したクロード・フォリエルが指摘しているように<sup>xix</sup>、このメモから次の2点、すなわち1) この写本は1336年以前に写されたものあるということ、2) 当時でも金銭的にかなり高価に取引されていたこと、が確認されるのみである。

前節で確認されたように、オック語は、13世紀のオクシタニアで話されていた〈声〉のことは、すなわち俗語である。この俗語を、ヴェランという高価な支持体とゴティック体という写本書物用の文字で〈書く〉ということは、何を意味しているのか。さらにこの異端殲滅の戦記である写本を、ローマ・カトリック正教会の司祭がなぜこの時代にわざわざ入手したのか。この司祭ジョルダンとは何者なのか、本当に正教派なのか、隠れカトリ派であった可能性はあるのか、といった写本稿BN-25425にまつわる謎は残されたままである。

このように、写本稿BN-25425には、決定的な物的証拠が新たに発見されない限り、簡単には解かれないであろう、ミステリアスな難問がいくつも纏わり付いているのだが、ここでは以下、この写本がその後、印刷本として出版され、一般の人々に広く知られるようになった経緯をとりあえず見ておこう。

### 3. 失われたもう一つの写本と印刷本

写本稿BN-25425は、17世紀になって、フランス国王の名高い政治家ジュール・マザランJules Masarin枢機卿の手に渡った。18世紀には、ルイ15世の政治顧問であり稀原稿収集家として有名なピエール＝ポール・ボンバルドゥ・ドゥ・ボーリユーPierre-Paul Bombarde de Beaulieu<sup>xx</sup>によって買い取られた。その後、ラ・ヴァリエール公爵duc de La Vallièreの個人蔵書館La collection du duc de La Vallière<sup>xxi</sup>に保管されていたが、彼が死んだ1780年には、王立図書館Bibliothèque du Roiに回収され、そのまま国立図書館に25425の番号が付されて所蔵されていたのである。

国立図書館に眠っていた写本稿は、1837年、ソルボンヌの教授クロード・フォリエルClaude Faurielによって、原文に現代フランス語訳を付けて出版された。出版元はパリ王立印刷所Paris Imprimerie Royaleで、この本の扉表紙には『アルビジョワ異端教徒に対する十字軍の物語：その時代を生きた一人の詩人によってプロヴァンス語韻文で書かれた物語』*Histoire de la Croisade contre les Hérétiques albigeoi, écrite en vers provençaux par un Poète contemporain*というタイトルが付されていた(以下、フォリエル版と呼ぶ)。写本稿BN-25425は最初、『物語』*Histoire*として出版されたものだった。番号で呼ばれていた中世的な写本に、近代的な〈作品という概念〉には欠かせないタイトルが与えられたのである。

『アルビジョワ十字軍の歌』の完全な写本は、このBN-25425ひとつしか現在のところ発見されていないのだが、写本断片がもう一つ、中世ロマンス語＝オック語の研究とトルバドゥール研究で有名なフランソワ・レイヌワールFrançois Raynouardによって所有されていた(以下、これをレイヌワール写本と呼ぶ)。この断片については不明な点が多く、今

回の研究では写本を直接調査確認することはできなかった。青山学院大学総合研究所人文学系研究センターの研究スタッフはこの断片化したレイヌワール写本はその後紛失したとしている。「Raynouardが一時所持していた写本（その後紛失）の写しが、彼の刊行したLexique roman中に残されている（プロローグにあたる第1節、および第2節の最初の3行のみ）。この断片の中で作者は自分自身の名前や経歴について語っている」<sup>xxii</sup>と述べられている。

このLexique romanとは1838年に出版された『中世ロマンス語の語彙集とトルバドゥール言語辞典——他のヨーロッパのラテン語系言語と比較して』第1巻*Lexique roman ou Dictionnaire de la langue des troubadours comparée avec les autres langues de l'Europe latine, Tome Premier*<sup>xxiii</sup>のことで、この中にレイヌワール写本断片が引用されているのだ。今回Bibliotheca Regia Monacensis所蔵の1838年刊オリジナル版を電子書籍で閲覧することができたが、これは『アルビジョワ十字軍の歌』を印刷本として刊行しているのではなく、トルバドゥール研究の一環として『歌』の一部が引用されているにすぎないので、正確には出版本ではないのかもしれない。しかしこの書き出しのプロローグは、後に詳述するように、『歌』の作者について考えるとき、極めて重要な役割をはたしているので、この辞典を避けて通ることは大きな間違いにつながるだろう。この部分が欠損していた写本稿BN-25425を元にして出版したので、フォリエル版では「その時代を生き残った一人の詩人」が書いたとタイトルに入れてしまったのである。よって拙論では、これを第二の出版本とみなすことにした（以下、これをレイヌワール辞典版と呼ぶ）。青山学院大学の研究スタッフは、レイヌワールが持っていたとされる「断片のほうが作者のoriginalに近く、写本Aのほうはremanieur（これが後に説明するcontinueurと同一人物である可能性もあるが）の手で改修がなされ、originalから

作者に関する情報を伝える部分が消し去られたものであろう」と指摘している。写本Aと呼ばれているのは写本稿BN-25425のことである。

ここには大きな疑問が残されている。作者に関する情報が「消し去られた」と言われながら、別の3行が「挿入された」とも言われている<sup>xxiv</sup>。つまりレイヌワール写本断片で「モントーバンにやって来て、/そこに10年滞在し、12年目に出ていった/なぜなら破滅を予見したから」Pois vint a Montalba, si cum l'estoria dit./S'i estet onze ans, al dotze s'en issit./Per la destructio que el conog e vitという部分は、写本稿BN-25425では「彼は博識で勇敢だ、この物語にあるように。/僧侶や俗人から厚く信頼され/伯爵や副伯爵に愛され慕われていた。」Mot es savis e pros, si cum l'estoria dit./Per clergues e per laycs fo el forment grazit./Per comtes, per vescomtes amatz e obezit. となっている。極めて高価なヴェランに本文を写記するとき、まるでその辺のメモ用紙にするように、適当に写しとったなどということはあり得ないのではないか。この部分は近代的感覚からとらえた作者紹介ではなく、これから『歌』を歌うトルバドゥールが自らを紹介する前口上である。したがってそのつど吟じる詩人が代わる毎に差し替えられるべき部分であるということだろうか。レイヌワール写本のプロローグを写本稿BN-25425に書き写した人物は、作者ギヨームを紹介する部分を消去したのか、それとも別のものを挿入したのか。もしギヨームの自己紹介プロローグを消去したり書き換えたりしたのが後半の『歌』をつくった不詳の詩人であるなら、彼はなぜそのようなことをする必要があったのか……。

このような疑問は依然残されたまま、このレイヌワール写本断片の引用文の出現によって、以後出版される『歌』には、作者名として「ギヨーム・ドゥ・テュデル」という固有名詞が与えられることになる。詳しいことは不明の、現在のスペイン北部、当時の



ナヴァール王国にある小さな村テュデルに、ギヨームと呼ばれた聖職者兼吟遊詩人が本当に存在したのかどうか、確証を得るのは難しいかもしれないが、我々が現在作者として認識している作者名はこうして、今は失われた写本の断片から付けられたのである。

次に、第三の出版本について。1875年から1879年にかけて、ポール・メイエ Paul Mayerは、『アルビジョワ派に対する十字軍の歌：ギヨーム・ドゥ・テュデルによって始められ不詳の詩人によって続けられた歌』*La Chanson de la Croizade contre les Albigeois, commencée par Guillaume de Tudèle et continuée par un poète anonyme*というタイトルで、フランス歴史学会のためにこの本を出版した(以下、メイエ版と呼ぶ)。前出のフォリエル版と同様に、原文と現代フランス語訳で成立していたが、タイトルは『物語』*Histoire*から『歌』*Chanson*に変えられ、さらに近代的な〈作品という概念〉にとってやはり欠かせない著者名が与えられた。フォリエル版で「その時代を生きた一人の詩人によって書かれた」とされていた部分が、「ギヨーム・ドゥ・テュデルによって始められ不詳の詩人によって続けられた」と変更された。ギヨームは最初の2772行 (les premiers 2772 vers) を「始め」、不詳の詩人が二番目の6808行 (les deuxièmes 6808 vers) を「引き継いだ」——このことがタイトル内で暗示されたのである。

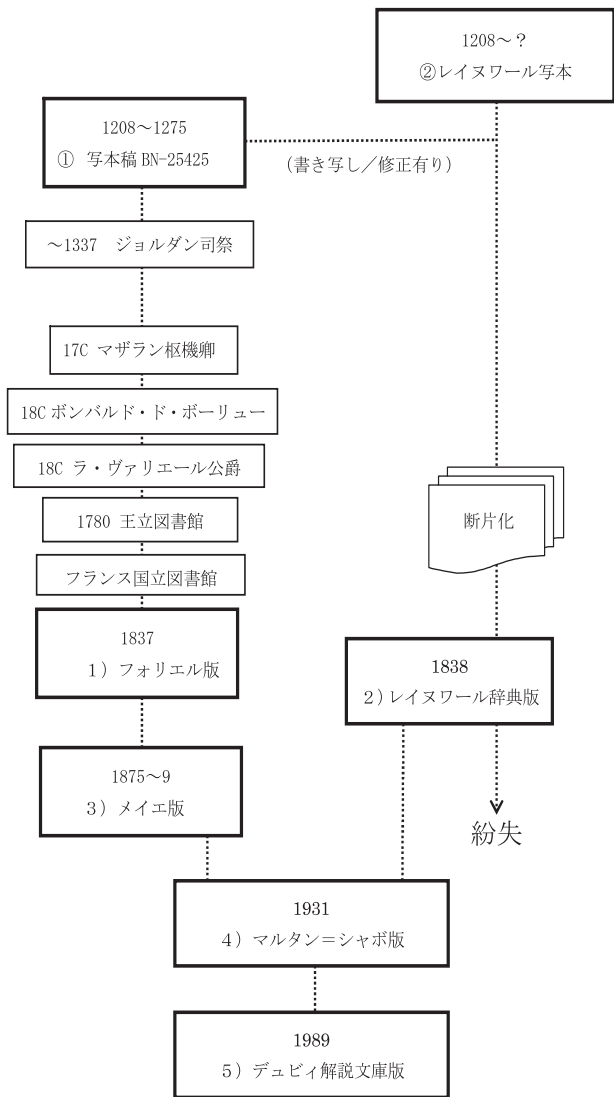
四番目の出版本は、1931年、パリ国立古文書館の古文書管理官をしていたウジェーヌ・マルタン＝シャボ Eugène Martin-Chabotによって出版された。原文と現代フランス語翻訳の扉表紙には『アルビジョワ十字軍の歌』*La Chanson de la Croisade albigeoise*とのみ表記されたのだが、この出版では三巻に分冊され、それぞれ中表紙に「第一巻：ギヨーム・ドゥ・ティデルの歌」tome 1: La Chanson de Guillaume de Tudèleと「第二巻：不詳の作者による詩、その1」tome 2: Le Poème de l'auteur

anonyme, part 1と「第三巻：不詳の作者による詩、その2」tome 3: Le Poème de l'auteur anonyme, part 2というサブタイトルが付けられた(以下、マルタン＝シャボ版と呼ぶ)。拙稿ではこの扉表紙タイトルを標記している。このマルタン・シャボ版で初めて「作者」l'auteurという言葉が使用されるのだが、これこそ近代的な〈作品という概念〉を補い生成させる言葉である。作者を知ること、作品を解すること——これは、美術にしても音楽にしても文学にしても、あらゆる表現に、それをつくった人物が固有名詞をもって署名することで〈作品〉が完結するという近代的概念の根底にある。

五番目の出版本は、1989年にマルタン・シャボ版をほとんどそのまま引き継ぐ形で文庫Libre de Poche化された、ミシェル・ザンク Michel Zink監修・序文、ジョルジュ・デュビイ Georges Duby解説の『アルビジョワ十字軍の歌』*La chanson de la Croisade albigeoise*である(以下、これをデュビイ解説文庫版と呼ぶ)。現在、世界中の最も多くの国で読まれているのはこのリーブル・ドゥ・ポッシュであるが、この本のタイトルでは、作者名は二人とも消えている。

## おわりに

これまで、『アルビジョワ十字軍の歌』の(1)2つの写本——①写本稿BN-25425, ②レイヌワール写本,(2)5つの出版本——1)フォリエル版, 2)レイヌワール辞典版, 3)メイエ版, 4)マルタン＝シャボ版, 5)デュビイ解説文庫版, を見てきた。その結果、②のレイヌワール写本断片がオリジナル原稿に最も近い写本であることが分かった<sup>xxv</sup>。しかし現在この写本は、断片も含めて全て紛失している。『アルビジョワ十字軍の歌』は、事件が起こった現場の生々しい声を寄せ集めたドキュメンタリー作品“報告書/のようなもの” document/aireであ



図表 1. 『アルビジョワ十字軍の歌』の二つの写本と五つの出版本を示す系譜図

る。十字軍に参加した当事者の声を聞いて（現地に自分の体を置いて）取材した断片を編集し、物語的にもまとめたものとして（時間軸や空間軸を調整して）報告することは、レポルタティオ reportatio と呼ばれていた。現場で聞いた〈声〉を書きとめるレポルタティオは、異端・正統を問わずテキストを〈声〉で語る説教師の「筆録説教」としても威力を發揮したが、これが近年のフランス語でルポルタージュ reportage と呼ばれる（報告文学や記録文学とも呼ばれる）ようになった。『アルビジョワ十字軍の歌』もそういう報告文学の一つである。13世紀南フランスで起こった史実を美しいプロヴァンサル

で現在に伝えるこの貴重な『歌』の唯一の写本は、フランス国立図書館に所蔵されている①写本稿BN-25425のみであるが、これは②レイヌワール写本を誰かが書写したものである。誰であるか特定されていない。①②ともに、書写された年代は1208年以降、1275年以前とみなされるが、①のほうが②よりも新しい。そして5つの印刷本のうち①に依拠しているのは1) フォリエル版、3) メイエ版であり、②に依拠しているのは2) レイヌワール辞典版、4) マルタン=シャポ版、5) デュビエ解説文庫版である。これらの写本および印刷本の系譜を整理すると、以下の図表のようになる。

『歌』を“つくる”とは、民衆が覚えやすいメロディに、覚えやすい詩をのせることである。それに対して“書く”とは、そのメロディと詩をセットで記録することである。現在のような譜面とはまた違った方法で〈声〉を記号化して記録しなければならない。オック語で書かれた南フランスの『歌』に限らず、我が国の『平家物語』も含めて、あらゆる口頭伝承文学が〈声〉と空間をメディアとしている以上、一体誰が作者なのか？という疑問が常につきまとうことになる。作者を個人に特定することは、それほど容易ではない。不詳の作者Anonymeの詳細は、どこまでいっても不詳のまま。しかし、固有名詞を持つ作者にこだわる必要はない。なぜなら『アルビジョワ十字軍の歌』は、近代的な作者という概念すらなかった時代に書かれているからだ。むしろ我々は今後、『歌』をつくった作者達は、歌ったり踊ったり説話したりして歴史的物語récit historiqueを〈声〉で伝承していた人たちで、ゴシック書体の写本稿BN-25425は、彼らの使っていた楽譜や記録の断片をまとめて誰かが別の機会に書物用書体で写したものであるという立場をとることになるだろう<sup>xxvi</sup>。が、ここでの結語はまだ早急である。

## 註

- i Henri Gougaud, dirigée par Michel Zin, Préface de Georges Duby, *La chanson de la Croisade albigeoise*, Avant-Propos, Libre de Poche, 1989, p. 35.
- ii 我が国の軍記物叙事詩『平家物語』が書かれたのもほぼ同時代である（1240年に藤原定家によって書写された『兵範記』（平信範の日記）の紙背文書に「治承物語六巻号平家候間、書写候也」とあるため、それ以前に成立したと考えられている）。テキストの成立の仕方も、トルバドゥールと琵琶法師の差はあれよく似ており、洋の東西を問わず中世という時代の口頭伝承と写本・文字化によるエクリチュールのシステム化が進んでいたことを示している。この『平家物語』との比較をした着眼鋭い先行研究として、マイケル・ワトソン Michael Watsonの「クロニクルからナラティヴへ—『平家物語』と『アルビジョワ十字軍の歌』」Chronicle to Narrative: *Heike monogatari and La Chanson de la Croisade Albigeoise*, 『平家物語 研究と批評』山下宏明編（有精堂, 1996年6月）が挙げられる。
- iii 12世紀南フランスの詩は、トルバドゥール達によって歌われるものであり、読まれるものではなかった。今日ではあたりまえの黙読（印刷物を黙って眼で〈読む〉）という行為は——スコラ哲学の時代にすでにヨーロッパで行われていたと指摘されているが（ジャクリーヌ・アメス「スコラ学時代の読書形式」『読むことの歴史——ヨーロッパ読書史』大修館書店, 2000, pp.135-56）——文字を読める人たちに限られていた。文字を読める人はラテン語を学んだ聖職者達だった。諸侯や領主であっても庶民であっても文字を読めない人は、写本を〈唱和〉する（あるいは誰かが歌う）行為によって〈知〉の世界に接していた。しかもその写本は（たとえいたるところで複製されていても）“世界に一つしかない”と信じられていたもので、仏教世界の経典と同様に、〈声〉に出すことによって真実/真理となるものであった。そして書くこと的前提には、唱和しやすいように、また暗唱しやすいように、必ず音韻があり、リズムがあり、ビートがあった。音韻の優れたものだけが〈詩〉とみなされていたのである。
- iv Georges Duby, Dirigée par Michel Zin, Avant-Propos de Henri Gougaud, *La chanson de la Croisade albigeoise*, Préface, Libre de Poche, 1989, p. 11.
- v ジョルジュ・デュビュはこうも言っている、「よく知られているように、この血塗られた十字軍は公式には南フランスの異端カタリ派に向けられたものだったが、実際には、12世紀にこの地で花開いていた文明を容赦なく撃破するものとなった」(Georges Duby, 1989, *Ibid.*, p. 11.)
- vi Claude Fauriel, éd., *Histoire de la croisade contre les hérétiques albigeois écrite en vers provençaux par un poète contemporain*. Paris, Imprimerie royale, 1837. p. VI.
- vii マルタン・シャボ版では「丸いゴシック体」gothiques arrondiesと言われている。中世南仏で頻繁に用いられた文字と解説している (Martin-Chabot, Eugène, ed., *La chanson de la croisade albigeoise. I, la chanson de Guillaume de Tudèle*. 1<sup>e</sup> ed. Paris, Librairie Ancienne Honore Champion, 1931. Introduction p. VXIII.). またメイエ版では「丁寧に書かれたゴシック体」gothique très soignéeと表現されている (Paul Meyer, ed., *La chanson de la croisade contre les Albigeois/ commencée par Guillaume de Tudèle et continuée par un poète anonyme*. Paris, Renouard, H. Loones, 1875-1879, Introduction, XXIV.).
- viii スタン・ナイト（高宮利行訳）『西洋書体の歴史——古典時代からルネサンスへ』慶応義塾大学出版会, 2001, p. 10.
- ix Robert Lafont, ed., *Les Cathers en Occitanie*, Fayard, 1982. p. 340
- x スタン・ナイト, 2001, 前出書, p. 10.
- xi ポール・サンガー「中世後期の読書」『読むことの歴史——ヨーロッパ読書史』大修館書店, 2000, p. 170.
- xii 樺山紘一『本の歴史』河出書房新社, 2011, pp.38-9. 中世後期14. 15世紀になると、『ベリー公のいとも華麗なる時祷書』*Les Belles Heures du Duc de Berry*を描いたランブール兄弟frère de Limbourgのように細密画



(ミニチュアール)の専門家によって高価な美術品が作製されるようになる。

- xiii 工藤進『声——記号に取り残されたもの』白水社, 1998, p. 178.
- xiv 工藤進, 1998, 同前書, p. 178.
- xv Georges Duby, 1989, *op. cit.*, p. 16.
- xvi Georges Duby, 1989, *Ibid.*, pp. 17-22.
- xvii Georges Duby, 1989, *Ibid.*, p. 24.
- xviii Claude Fauriel, 1837. *op. Cit.*, p. ii.
- xix Claude Fauriel, 1837. *Ibid.*, p. ii.
- xx Pierre-Paul Bombarde de Beaulieuは, 1698年にベルギーのブリュッセルで生まれ, 1783年にパリで死亡。父親はブルッセル王立劇場を設立したローマ人音楽家のジオ・パオロ・ボンバルダGio Paolo Bombarda (1650-1712)である。
- xxi 正式名はルイ・セザール・ドゥ・ラ・ボース・ル・ブラン＝ラ・ヴァリエール公爵(1708年生-1780年没)で, ルイ14世の寵愛を得たラ・ヴァリエール侯爵夫人の甥である。その財力を活かした図書館La collection du duc de La Vallièreは, 貴重な写本を含む蔵書30,000冊を有する18世紀最大の個人コレクションである。
- xxii 小佐井伸二・西澤文昭・鳥居正文「『アルビジョワ十字軍の歌』——テキスト研究と翻訳の試み——」『研究叢書』第2号, 青山学院大学総合研究所人文学系研究センター, 1993, p. 78.
- xxiii François-Juste-Marie Raynouard, *Lexique roman ou Dictionnaire de la langue des troubadours, comparée avec les autres langues de l'Europe latine, tome premier*, Chez Silvestre, Libraire, Paris, 1838, pp. 228-9.
- xxiv 小佐井伸二・西澤文昭・鳥居正文, 1993, 前掲書, p. 118.
- xxv レイヌワール写本とはもう一つ別に, 写本断片があると言われている。「ケルシー年代記」Annales quercynoisのなかにはさみ込まれていた断片で, 『ケルシーを襲った惨禍』*Esbats sur le pays de Quercy*, というタイトルが付けられ, 現在はグルノーブル図書館の所蔵(n° 1158)になっている。今回この断片を閲覧できなかった。またこれに関する正確な情報をほとんど入手できなかったので, 本稿ではあえて触れなかった。今後の調査が期待される。
- xxvi 13世紀中葉の〈書く〉という行為には, 2種類の〈書く〉があった。「12世紀になるとカロリング小文字が変容して大きく二つの書体が現れてくる」。その一つは「書物書体」で, もう一つが「草書体」である。前者は, 貴重な豪華本を書いたり写したりするときに用いられ「デザイン的には美しいが必ずしも読みやすすくない」のに対して, 後者は実務文書等で用いられた早書きの書体である。「草書体のこうした用途は同時代人によく意識されていた」(大黒俊二『声と文字』岩波書店, 2010, pp. 131-2)と言われている。

## テキスト・参考文献

- Catel, Guillaume de, *Histoire des comtes de Tolose, avec quelques traitez et chroniques anciennes concernant la même histoire*. Tolose, P. Bosc, 1623.
- Compayré, Clément, *Études historiques et documents inédits sur l'Albigeois, le Castrais et l'ancien diocèse de Lavaur*. Albi, M. Papailhiau, 1841.
- Duby, Georges, Dirigée par Michel Zin, Adaptation de Henri Gougaud, *La chanson de la Croisade albigeoise*, Libre de Poche, 1989
- Fauriel, Claude, éd. *Histoire de la croisade contre les hérétiques albigeois écrite en vers provençaux par un poète contemporain*. Paris, Imprimerie royale, 1837.
- Guibal, Georges, *Le poème de la croisade contre les Albigeois, ou l'Épopée nationale de la France du sud au XIIIe siècle*. Toulouse, A. Chauvin, 1863.

- Guizot, François, éd., *Histoire de la guerre des Albigeois. Chronique de Guillaume de Puylaurens. Des gestes glorieux des français de l'an 1200 à l'année 1311*. Paris, J.-L.-J. Brière, 1824. (Collection des mémoires relatifs à l'histoire de France, 15)
- Lafont, Robert, ed., *Les Cathers en Occitanie*, Fayard, 1982.
- Martin-Chabot, Eugène, ed. *La chanson de la croisade albigeoise. 1, la chanson de Guillaume de Tudèle*. 1<sup>e</sup> ed. Paris, Librairie Ancienne Honore Champion, 1931.
- Martin-Chabot, Eugène, ed. *La chanson de la croisade albigeoise. 2.1 Le Poème de l'auteur anonyme*. 1<sup>e</sup> ed. Paris, Les Belles lettres, 1989.
- Martin-Chabot, Eugène, ed. *La chanson de la croisade albigeoise. 3.2 Le Poème de l'auteur anonyme*. 2<sup>e</sup> ed. Paris, Les Belles lettres, 1973.
- Meyer, Paul, ed. *La chanson de la croisade contre les Albigeois/ commencée par Guillaume de Tudèle et continuée par un poète anonyme*. Paris, Renouard, H. Loones, 1875-1879. 2 vol.
- Pierre des Vaux de Cernay, Guizot, François, éd., *Histoire de l'hérésie des Albigeois et de la sainte guerre entreprise contre eux (de l'an 1203 à l'an 1218)*. Paris, J.-L.-J. Brière, 1824. (Collection des mémoires relatifs à l'histoire de France depuis la fondation de la monarchie française jusqu'au 13<sup>e</sup> siècle..., 14)
- Puylaurens, Guillaume, Duvernoy, Jean, éd., *Chronique : 1229-1244*. Paris, CNRS éd., 1994.
- Roger, Paul, *Archives historiques de l'Albigeois et du pays castrais*. Albi, S. Rodière, 1841.
- 大黒俊二『声と文字』岩波書店, 2010
- 小佐井伸二・西澤文昭・鳥居正文『『アルビジョワ十字軍の歌』——テキスト研究と翻訳の試み——』『研究叢書』第2号, 青山学院大学総合研究所人文学系研究センター, 1993
- 樺山紘一『本の歴史』河出書房新社, 2011
- 工藤進『声——記号に取り残されたもの』白水社, 1998
- 関哲行『旅する人々』岩波書店, 2009
- ナイト, スタン (高宮利行訳)『西洋書体の歴史——古典時代からルネサンスへ』慶応義塾大学出版会, 2001
- シャルティエ, ロジェ (編)『読むことの歴史——ヨーロッパ読書史』大修館書店, 2000
- 渡辺昌美『異端カタリ派の研究』岩波書店, 1989
- 渡辺昌美『異端者の群れ——カタリ派とアルビジョワ十字軍』八坂書房, 2008
- ワトソン, マイケル「クロニクルからナラティヴへー『平家物語』と『アルビジョワ十字軍の歌』」Chronicle to Narrative: *Heike monogatari and La Chanson de la Croisade Albigeoise*, 『平家物語 研究と批評』山下宏明編, 有精堂, 1996